

近代の地衣学者は奇妙な事だが *Usnea longissima* Ach. の含有成分に関しては甚だ無関心である。そのタイプの産地は Lausitz で、現在では東独のチェコとポーランド国境地帯である。もちろんその反応はどこにも記載はない。Motyka は 8 変種を認めたが、反応としては中軸の J 反応だけを記した。これに対し Keissler は Motyka の挙げた var. *contorta* Elenk. のみを採用し、また K, C,  $\text{HNO}_3$ ,  $\text{H}_2\text{SO}_4$ , アニリン, Pd 等が何等の呈色を与えないと認めた。一方 Zopf は *Usnea longissima* Ach. のババリア産の材料で抽出を行ない、ウスニン酸とバルパチン酸を得たと称するが、彼のバルパチン酸と称するものは実はザフラクタ酸であることはすでに筆者の論破したことである。

一方筆者は先ず日本産の *Usnea longissima* を材料として、含有成分の搜索を行ひ、ウスニン酸の他にバルパチン酸あるいはザフラクタ酸あるいはエベルン酸あるいはサラチン酸あるいはフマルプロトセトラール酸を含むものを分離し、菌体数の最も多いバルパチン酸含有のものを主体とし、他は夫々 subspecies として区別した。日本以外の地帯、例えば台湾、朝鮮、南満、ヒマラヤ等の標本でも大体日本産に似た成分の分布を示して居る。ところが検査に使用した標本は甚だ少数ではあるが、欧州、北米産のものからはウスニン酸の他にザフラクタ酸、エベルン酸を含むものは見つけたが、バルパチン酸やサラチン酸を含むものは見付からなかった。尚ヒマラヤ産の標本のうちバルパチン酸やザフラクタ酸、エベルン酸などのデブサイドを含まず、脂肪系の酸を含むものを見つけた。この脂肪酸は数種の混合であるが、そのうち特殊のクロマトグラムを示すものの二種を選定し、一つを subsp. *dubia* という亜種にし、他の一種は旧来から *Usnea longissima* var. *tenuis* Th. Fr. と呼ばれる個体に主として出現するが、ある個体では両方の脂肪酸を含むものもあるので、その差は量的の問題に過ぎないことが判明した。かくの如き成分的の差違を生ずる原因をどこに探るかは今後の問題で、異種の菌のために生ずるか、菌は同一でもこれと共棲する藻の異なるために惹起されたのかを決定する好材料というべきである。

□鈴木時夫：日本森林植生の最上級単位と領域 7 pp. 日本植生図付（色刷）ペドロジスト10巻2号別刷、これは単行本ではないが大変参考になると思うので紹介する。鈴木氏は森林植生の専門家であるが、今回今までの知見を太平洋をめぐる生物界の立場から整頓して、氏独自の植生図にまとめられたもの、従来の植生図からみると思い切ってかわったものであって、日本の植生を大きくトウヒ・コケモモ、ブナ・ササ、ツバキの三クラスに分けたが、いわゆる針葉樹とならべてハイマツ・オールドルを以て亜高山帯の極盛相とみた扱い（地図では区別）、ツガ、アカマツの夫々オールドル、また水田を中心とする地帯、ナラ・クリ二次林なども特に図示するなど、我々にとっても甚だ示唆に富む。地図の印刷は中々美しい。東京都文京区弥生1丁目東大・農学部林産化学教室内“ペドロジスト”発行所で一部送料共150円で頒けている。

（前川 文夫）